

20歳を迎える長浜城

四十年前前(今浜(現長浜市))のまちに城をつかったのは、当時、天下取りに気炎を上げていた豊臣秀吉だ。湖に面した城には、四十年間に五人の主が入城した。昭和五十八年に雄姿を現したのは、市民の浄財によって建てられた新しい長浜城だ。博物館として機能する現代の城からは、秀吉も眺めたであろう、さざなみ揺れるびわ湖が一望できる。



特集① まちのシンボル

長浜城の今昔

伝統を現代に生かす博物館

長浜城の再興がまちづくりにも果たした役割

市長長浜城歴史博物館館長 吉田 一郎

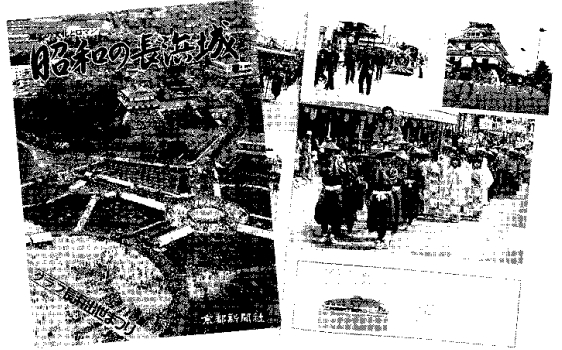
昭和五十八年四月五日、長浜城は見事に完成し歴史博物館として開館した。「城ができた」「出世まつりだ」。積年の市民の夢だった長浜のステイタスシンボルの実現に町は沸きに沸いた。市民の多くが喜びと誇りを実感した。

五万市民が、四億三千万円というお金を出し合い、建設準備や展示計画、開館記念イベント準備や実行に多くの市民が参画したからこそ、その喜びが爆発したと言えるだろう。開館記念行事「長浜出世まつり」は、十日間で五十万人という空前の集客を見た。会期中五十をこすイベントが展開された。オープニングパレードは長浜青年会議所の企画・演出で、市民五千六百人が参加するという大パレードとなった。「湖北の文化とロマン」をテーマに、ふるさとを再発見するイベントがあった。主催者もスタッフも観客もみんなで楽

しんだお祭りだった。参加した市民は、「ヤッター」という充実感に酔いしれた。「城ができた」という喜びと誇り、「やればできる」という自信、この三つの要素が、まちに対する市民の愛着を高め、長浜のまちづくりに火をつけた。秀吉が町を開いて四百年、市制施行四十年という長浜市の歴史の中でも、一大エポックを画した年だった。

この年を契機に、後記の「まちづくり年表」のように、市民主導のまちづくりのうねりが起こった。その動きは、雨上がりのタケノコを見るようで、町衆パワーが炸裂していくようだった。

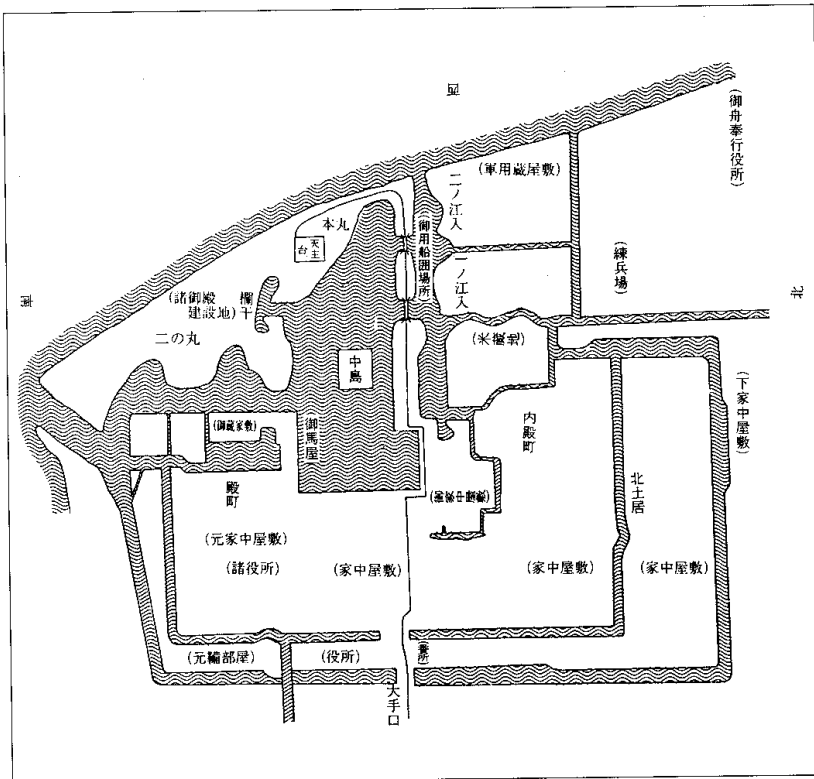
「このまちをよくするために自分もお役に立ちたい」という市民意識の高まりのなかで、「こんなことなら自分でもできる」という市民が立ち上がっていった。市民間に競走意識に似たものを感じるほどのムーブメントだった。



▲長浜城歴史博物館開館を祝う長浜出世まつりの様子を特集したグラフィック誌「昭和の長浜城」(京都新聞社)も発行された

人は誉められてヤル気を出すように、「長浜はいい町ね」「市民のパワーがすごいね」という外からの賞讃の音が、市民意識をいっそう鼓舞させた。そして、楽しみながら、町のように磨きをかけていく仲間軍団が育っていった。行政に依存せず、市民が行政を引っばってゆく「長浜方式」とさえ言われる官民のパートナーシップが醸成されていった。何世紀にもわたる町衆自治の伝統の上に、新しい自治の意識とスタイルが育っていったように思える。

私が教える大学でも、学生たちは口々に「長浜の人は、町のためにどうしてそこまで



▲長浜城縄張り推定図（『滋賀県中世城郭分布調査6』(滋賀県教育委員会)より）

長浜城四十年の歴史

秀吉による築城

長浜城は、浅井氏の旧領を与えられた羽柴（豊臣）秀吉によって、天正二年（一五七四）頃から坂田郡今浜の地に建造された城郭である。その完成は、天正四年の春頃と見られている。合わせて秀吉は城の東に城下町を建造、湖北支配の政治的・経済的中心を一挙に造りあげた。城が完成した頃、「今浜」の名を「長浜」に改めている。

城の構造は、図を見ていただきたい。現在の駅前平和堂東側の川が外堀の跡、そこから内側（湖側）が城内となる。二重の外堀と内堀の間には、家臣団の屋敷が建ち並び、内堀を隔てた本丸や二の丸には、天守閣や御殿が展開した。本丸の位置は、現在の豊公園内の復興天守閣の付近、二の丸は市民プール付近となる。南北八百メートル、東西六百メートルに及ぶ広大な敷地であった。

で、長浜の地を訪れることはなかった。

長浜城天守閣破却

秀吉が去った後、湖北・長浜の地は、新た

ただ、図では本丸・二の丸が、自然地形のよな屈曲した汀線でおおわれている。これは、長浜城が元和元年（一六一五）に廃絶した後、汀線を固めていた石垣が運ばれ、城跡が田地や畠となって地形が変形した結果である。城が機能していた頃は石垣でおおわれ、内堀外側のようにもつと直線的な汀線であったと推定される。事実、昭和四十四年や昭和五十三年に発掘された石垣の根石は、直線的に並ぶものであった。

賤ヶ岳合戦と長浜城

秀吉は本能寺の変後の清洲会議まで、この城の城主であった。清洲会議の結果、城は柴田勝家の甥・柴田勝豊に譲られることになる。勝豊は八月に城に入ったようだが、賤ヶ岳合戦の前に秀吉の攻撃にあい、わずかに四ヶ月後の十二月には、城を秀吉に返してしまつた。秀吉は賤ヶ岳合戦の後方基地として、長

に佐和山城主となつた堀秀政の領国に編入された。したがって、長浜城は城主不在となつたと見られる。翌年、秀吉は三月から十一月にかけて小牧・長久手の合戦を戦う。この合

奥ひわ湖と竹生島
朝光の出発点

民宿 中茂

人情、語らい！
湖畔の宿

東浅井郡びわ町南浜湖畔
TEL&FAX 0749-72-2313

天正十一年（一五八三）五月七日、前々日に長浜城へ入つていた羽柴秀吉は、勅使吉田兼見と対面した。勅使は、四月二十一日に行われた賤ヶ岳合戦の勝利と、四月二十四日の北庄城の落城・柴田勝家日刃を受けて、朝廷が送った祝賀の使いであった。秀吉は、生涯で初めて勅使に対面することになり、下賜の太刀を与えられた。朝廷も信長に代わる実力者として、秀吉を無視し得なくなったのである。

秀吉はこの七日に、長浜をたつて安土に向かう。この日は、天下人・秀吉にとつても記念的一天だが、長浜城主であった秀吉にとつても忘れられない日となった。すなわち、記録上では秀吉が長浜城に入った最後の日だからである。これ以後、秀吉は山崎城・大坂城・伏見城と居城を変え、尾張国での放鷹のため佐和山付近を通過することはあつたが、慶長三年（一五九八）に六十二歳で没するま

戦で秀吉が作った陣立図が残っているが、そこには「長浜衆 千三百」の文字が見える。彼らは城主不在の中、長浜城の留守居に当たつていた武将たちと考えるのが普通だろう。この頃までは、尾張で戦う秀吉の後方支援基地として、長浜城はまだ機能していた。

長浜に所在する財団法人下郷共済会が収蔵する文書に、年号がない正月十三日の秀吉朱印状がある。ただ、「秀吉」と署名があり、朱印が用いられていることから、小牧・長久手合戦の翌年・天正十三年の文書と考えられる。この文書の冒頭には、「其地天守壊候」とある。これは、二つの読み方が可能であろう。「其の地の天守壊れ候」と、「其の地の天守壊し候」である。「壊れた」のか「壊した」のか。事情はまったく逆転する。

秀吉は天正十一年に賤ヶ岳合戦で勝利した後、その支配下に入った領国については、余分な城は破却して、反対勢力の拠点をなくする「城わり」の政策を打ち出していた。だか

古戦場賤ヶ岳のふもと
田園風景の静寂の中の
旅の宿、味の店

日観連・JR協定
科学旅館 **想古亭 森内**

滋賀県伊香郡木之本町大字1829
TEL: 0749-82-4127(代)
FAX: 0749-82-4988